

文学研究における他者との交流



海外交流

篠原 学*

Exchanges with Others in Literary Studies

Key Words: Stranger, Culture as an Institution, Agent for Culture

大阪大学大学院人文学研究科の篠原学と申します。近現代フランス文学を専門にしています。本稿では、私の研究と海外交流との接点について、お話しさせていただきます。

海外文学の研究をしているのなら、海外との交流くらい当然あるだろうと思われるかもしれません。もちろん、国際学会に出席すれば、必然的に海外の研究者と交流することになりますし、学会という場を離れた友人としての交流もあります。しかし、そうした交流は一時的であるか、さもなければ個人的にすぎ、ことさらに海外交流と銘打ってお話しするほどのものではありません。また、それらは研究活動に付随するものではあれ、研究そのものと本質的な関連があるわけではないのです。けれど、あらためて考えてみると、文学研究と海外交流というのは、そもそも相性の悪い取り合わせなのかもしれない、と思います。文学研究とはつまるところ、書かれたことばに孤独に向き合う営みであって、そこに交流すべき他者が介在する余地は一見してないからです。

文学研究とは何か、というのは簡単に答えられる問いではありませんが、その目的のひとつが、文学作品を通じて、ある国や地域の文化なり社会なりを深く知ることにあるのは確かです。たとえば、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を読むと、19世紀前半のフランス社会、もう少し限定すると、ナポレオンの没落から1830年の七月革命前後までの、

主として王政復古期の社会について知ることができません。ただ、それは読者がユゴーの想像力という眼鏡をかけてその社会を見ているようなもので——その眼鏡じたいが独特なものであることが研究者の興味を惹くのですが、それはともかく——作品を通り抜けてこちら側からあちら側へと届く視線はあっても、あちら側からこちら側に向かってくる視線はありません。つまり、つねに一方的的で、「交流」ということばの語感とは、そのあたりが噛み合っていないように感じられるのです。

ジャン＝ポール・サルトルという20世紀の思想家は、作家は書くことで読者の自由に呼びかけていると考えました。そうすると、作品を読むことはその呼びかけに対する応答ですから、そこでは、作家と読者のあいだに双方向的なコミュニケーションが成立していることとなります。学生時代にはじめてサルトルの著作を読んだとき、こうした考え方もあるのかと感心した——というのは傲慢な言い方かもしれませんが——ものですが、その後、研究生活に入って実感したのは、サルトルの主張は理念としては理解できるものの、作品の向こう側に誰かがいると考えることは、自分の実感とはかならずしも合致していない、ということでした。

私は今、将棋やチェスのようなボードゲームと文学との関係に関心をもっています。それはひとつには、対戦相手の存在を自身の成立の要件としているボードゲームが、文学研究の一方向性や、文学におけるコミュニケーションの可能性について、考えるためのヒントを与えてくれるからです。そのことについて詳しくお話しする紙幅はここにはありませんが、このゲームを通じて私が出会った他者について、以下ではお話しさせていただきます。

私は2008年の秋から2011年の秋までの三年間



* Manabu SHINOHARA

1980年10月生まれ
東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了(2014年)
現在、大阪大学大学院人文学研究科 外国学専攻 准教授
TEL: 0727-30-5352
E-mail: shinohara.manabu.hmt@osaka-u.ac.jp

を、フランス語圏で過ごしました。最初の二年間はスイスのジュネーヴに留学し、あとの一年はパリに留学していました。当時私は博士課程の学生で、博士論文を書かなくてはならない身の上でしたが、気晴らしによく将棋を指していました。同じ時期に留学していた日本人の学生が何人かいて、その人たちが私の将棋好きに付き合ってくれたのです。

あるとき、ジュネーヴ大学のカフェテリアの隅で友人と将棋を指していたときのことです。日本から持参したマグネットの将棋盤をテーブルに広げていたのですが、その盤上から、対局を眺めていたスイス人の学生が、一枚の駒——歩か桂馬だったと思います——をひょいと掴み上げたのです。これがもし将棋の大会だったら大問題です。将棋を指したことがあればお分かりいただけると思うのですが、一枚の駒があるかないかで局面はまったく違ったものになってしまいます。それにこの場合は、私は一組の盤・駒しかもっていませんでしたから、万が一駒を紛失するようなことでもあれば、それっきり将棋が指せなくなってしまいます。私は慌てて、その学生に駒を返すよう頼みました。ところが相手は私の要求など意に介さず、手のなかの駒をしげしげと見つめてこう叫んだのです。「漢字が書いてある！」

今思えば、あの瞬間に、私たちは異文化間の交流を果たしていたのだと思います。——いや、そういうよくある言い方では、制度によって認められた「文化」についてしか語るができないかもしれませんが。そのとき起きていたのはもう少し微妙なことでした。私は将棋のルールを知っていて、学生のマナー違反を咎めることができました。また、駒に漢字が書いてあることについては、将棋はチェスと違って駒の形状で種類を区別しないため、文字で示す必要があるのだと解説することもできました。そうやって相手の理解を矯正し、導いていくことには大きな意味があります。しかしそのさい、相手の最初の反応を取るに足らないもの、あるいは単なる誤解として切り捨てることには、どこかためらいを覚えさせるものがあります。その学生は、ある確立された「文化」の内部にいる私に、それを外から、いわばまっさらな目で捉えた姿を示してくれたのです。これが他者と出会う、ということでないとしたら、いったい何なのでしょう。

その後、学業の拠点をパリに移してから、私はパ

リ郊外の将棋クラブに顔を出すようになりました。それは主としてフランス語ネイティブたちの集まりでしたが、皆このゲームに習熟しており、一定の棋力に達していました。いちばん強い人はアマチュア四段くらいだったはずですが（当時私は二段程度でしたが、その自分より明らかに強いと感じました）。ジュネーヴ大学で出会った、盤上から駒を取り上げた学生に比べて、彼らは格段に「文化」を内面化していました。それでもときおり、他者の目で将棋を見ていることがこちらにわかる瞬間があり、自分とは異なる見方がとても興味深かったです。

私は唯一の日本人でしたので、将棋関連の話題について意見を求められることがしばしばありました。おそらくは、われ知らず、日本文化のエージェント的な立ち位置に身を置いていたのでしょう（という不遜に聞こえるかもしれませんが、留学経験者の多くに思い当たる節があるのではないかと思います）。よく覚えているのは、海外のプレイヤー、それも初心者のために、動きを図案化した駒を作りたいのだが、君はどう思うか、と問われたときのことです。その話を聞いて、私が咄嗟に思い出したのは、「漢字が書いてある！」と叫んだあの学生のことでした。たしかに、動きを図案化すれば、漢字が読めなくても将棋を楽しむことができます。でも、見たことのない文字が彫り込まれた駒に面食らうということのなかにも、文化を知ること固有の楽しみがあるのではないかと、そう思います。自分がどんな答えを返したのか、すっかり忘れてしまいましたが、あのとき提起されたのは、彼らが、あるいは私たちが、それによって他者であり続ける隔たりを撤廃するのか、それともそのままにしておくのか、という問題だったのだと思います。

文学研究における他者というものも、これと同じように考えることはできないでしょうか。

さきほど述べたように、文学研究はひたすらことばと向かい合う孤独な営みです。その孤独のなかにこそ、他者としての私がいるのではないかと。

海外文学を研究するという事は、制度化された「文化」のうちに入っていく、そのなかに場所を見出そうとすることです。文学作品を読むことで、私は、それが体現する「文化」にとって異質なものである自分を絶えず思い知らされながら、その内部へ、

取り込まれるようにして奥深く入っていきます。しかし、私が最終的にその「文化」を完全に内面化することはありません。フランスの詩人アルチュール・ランボーのことばを借りて言えば、私はひとりの他者であり、そうあることにとどまり続けるのです。

言うまでもなく、これはある「文化」に対して無知なままでよい、あるいは斜に構えていればよい、といった類の話ではありません。むしろ私は自分を駆り立て、その「文化」に分け入ろうと努めなくてはなりません。つまり私は、私が入っていこうと

する「文化」のエージェントとして、私自身を導いていかななくてはならないのですが、エージェントであると同時に他者でもあるという両義性を、孤独な営みである研究のうちで負わされているのです。研究においては、ただちに出会える他者がいるわけではありません。しかし、作品を読みつつこの両義性に耐えることは、現実の他者との交流を、ある意味で演じつつ準備することにほかならないと、私は考えています。

